

5月24日（日）主日礼拝レジュメ

「ペンテコステになされたみわざ」 使徒の働き 2章1～21節

ペンテコステは、過ぎ越しの祭りに続く種を入れないパンの祭りで大麦の初穂をささげてから七週間後、すなわち「七週の祭り」（出エジプト記 34 章 22 節、申命記 16 章 10 節）「刈り入れの祭り」（出エジプト記 23 章 16 節）の時期に当たる。このことから。ギリシャ語のペンテコステス（50 番目の）を語源とすることから五旬節とも呼ばれる。

1 節に「五旬節の日になって」とありますが、まさにこの時に聖霊が「激しい響きが」とともに、また「炎のような分かれた舌」が現れて、弟子たちに聖霊が下ったので、クリスチャンはこのことをペンテコステと呼び、記念するようになった。まず最初にペンテコステの意義を考えてみたい。その一つが十字架と復活の一連の贖いのわざの完了とともに、聖霊が下ることで新しい時代が到来したことを私たちに教えている。二つ目が神の贖いのわざの完了から今度は霊的な刈り入れ、つまり救いを人々に伝えていく新たな救いの歴史が始まったということ。特に 1 章 8 節にありますように地の果てにまで福音があかしされ、宣べ伝えられていく。そしてその初穂としてさまざまな地域から集まっていた人のうち三千人が弟子に加えられたことが 2 章 41 節に記されている。そして 2 章 17～21 節でペテロが旧約聖書の預言者ヨエルの預言を引用しているが、それがまさにこの五旬節の時に成就したと言える。

次に、ペンテコステにおける特徴的なことを見てみたい。まず一つが4節で、「御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。」とあります。これは何だかよく分らないことを話し出したということではなく、聖霊が下り、聖霊に満たされた弟子たちが預言を始めたということ。預言とは、神様からことばをいただき、それを人々に語ること。御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話し始めたというのは、神が話すべきことばを一人一人に与えて、それを一人一人が他国のことばで話し始めたと考えべき。そして彼らが話した内容というのは、もちろん詳しくは分りませんが、11節で「あの人たちが、私たちのことばで神の大きなみわざを語るのを聞くとは」とあるので、神がイエス・キリストを通してなした救いのわざを人々に語ったのだろう。そして神が語るべきことばを与え、また御霊によって真理を教えられ、知識を与えられたので、弟子たちは語る事が可能だった。以前は弟子たちはイエス様が十字架に架かれることの意味をよく理解できなかった。その弟子たちが神の大きなみわざを語る事ができたのは、人間の知識や経験ではなく、聖霊の助けによってなされることであるとあらためて思われます。

聖霊が下った時には2節に「すると天から突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり、彼らが座っていた家全体に響き渡った」とあり、3節には「また、炎のような舌が分かれて現れ、一人ひとりの上にとどまった。」とあり、聴覚と視覚において聖霊が下ったということがはっきりと分るかたちで現された。また4節で「皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。」ことについて、人々の反応は6節「呆気にとられてしまった。」7節「驚き、不思議に思って」であり、7節では「話しているこの人たちはみな、ガリラヤの人ではないか。」とのことばには、田舎者の彼らがなぜこのようなことばを話せるのだろうという馬鹿にした思いがあった。神がみわざをなす時には、普通では考えられないような、人が驚くようなことが起こる。私はそんな驚くようなことを経験していないと思わ

れる方があるかもしれないが、神の救いをいただくことができたこと自体が驚くべきことと言える。キリストを通して人を救うということ、神が人となってこの地上に来てくださったという事実は、あまりにも驚くべきことで、それを信じることができたということは、驚くべきこと。実際に、先ほども見ましたが、ガリラヤの人ではないとか、「彼らは新しいぶどう酒に酔っているのだ。」と、言わば場違いな場所で場違いなことを言って騒いでいるにすぎないと弟子たちのことを馬鹿にする人たちもいた。そう考えた時に、神に背を向け、自分を神として歩んでいる人たちが神を信じるようになるということは、いかに難しいことか。そう考えた時に、罪人であった自分が神を信じて、クリスチャンとされたこと自体が奇跡ではないかとあらためて思われる。

しかしこれで終わったわけではなく、41 節「彼のことばを受け入れた人々はバプテスマを受けた。その日、三千人ほどが仲間に加えられた。」とある。ペテロが語ったのは、旧約聖書からの引用とキリストのみわざ。聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるように語られたことばとみことばを通して御霊ご自身が働かれ、そして人を罪からの悔い改めとその罪からの救いへと導かれることの原則は今も決して変っていない。

1 章 8 節にある証人となる人は、聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに語る人。その人たちを通して今も全世界への宣教が進められている。私たちにとっては自分の置かれているこの所が地の果てである。この所で御霊に満たされて、主の証人として用いられたい。